

顕彰会便り

NO. 4

昭和62年(1987)3月24日
編集・発行
津田左右吉博士顕彰会
広報委員会
(美濃加茂市下米田町則光)
(TEL 0574-25-2714)

著述千秋功未了

会長 尾 関 公 見

津田博士顕彰会が創立されて二年を経過し、その事業として各位のご熱意と市からの格別のご配慮によって、新装なった図書館前に博士の偉大な業績とその努力を象徴する記念碑が建てられました。制作は市内在住の新進彫刻家・佐光庸行氏のユニークな着想と燃ゆる情熱によって日々ミ打ちが進められ、このたび除幕のはこびとなりました。学界の至宝とも仰がれる博士の数多い著作も第一歩はたゆみない読書から始まっていると思えます。

のため白鳥庫吉博士の全蔵書を読破されるなど、寝食を忘れて研究に没頭され、後日「自分ながらよくあれだけ勉強をした」と述懐されています。こうした努力は終生続けられました。ただ単に多読に終わることなく、古事にいう「眼光紙背に徹す」で、一々「あしかな読みをされ、批判、考証を重ねての努力でした。」



積みあげられた記念碑



大正の頃、津田博士の著述が積みあげられた記念碑

昨年十一月から今年の三月にかけて約四ヶ月間、野外で記念碑の制作をした。場所は市内前平公園の近く、建設会社の資材置場を臨時の仕事場とした。石彫の仕事は埃りと騒音のため人家から距離を置く必要があり、ある建設会社の社長の好意で土地を提供してもらったのである。冬の木枯しの風が吹く日は、瘦身にはしんどいが、研鑽精神には緊張を与え、研鑽をえてくれるので、私は冬に向うのが好きである。見せきり、石の原稿用紙は一枚が巾八十センチ、チ奥行き六十センチ、チ厚さ二、七センチ、重さ三〇キログラムである。総重量は約三、二トンの重さになる。これを八十八枚、博士の八十八歳の生涯にちなんで一枚々々三メートル十センチの高さに積み上げたのである。すなわち一枚が博士の一年を意味することになる。もっとも目に見える部分は、構造上七十枚、あと十八枚は地下に埋まっているわけである。また碑全体の構成は、背景の空間との関係性を配慮して、全体をねじめるように曲面から運動感が生まれるようにした。

石の原稿用紙を積む

佐 光 庸 行

私はこの碑を彼の精神に倣い知を積み重ねるように石を積み上げたのである。またがつて私はこの記念碑を「知の積層」と名づけたと思います。この碑を通して、私も人々が津田左右吉の精神を少しでも感じることができれば、者として望外の喜びである。終りにあたって、この碑を作る機会を私に与えていただいた顕彰会の皆さんにまずお礼を申し上げます。また、顕彰会との仲介で何かとお世話になった市の関係者のみなさん、アートダイレクターの(注)今井裕夫氏、彫刻の助手の谷松久、山本の諸兄にあらためて感謝の意を表します。一九八七・三、四月の発行

(注) 佐光庸行氏：武蔵野美大卒業後、イタリヤの工房などで石彫技術を習得。主な作品としては、市文化会館ホワイエ壁彫、サンケミカル社供養塔などがある。二四二年生。

